

総合人文学科

2016年度 試験科目

公募制推薦入試

一般入試A日程

一般入試B日程

● 共通学力試験 (P.003~)

● 小論文

● 共通学力試験 ● 小論文

前年度からの変更点

なし

● 共通学力試験

P.003

● 小論文

出題意図： 文章の読解力をみようとする問題です。とくに、課題文の構造がきちんとつかめているかどうかをみようとしています。そのために、課題文には、構造が明らかな解説文を選んでいきます。

2015年度 一般入試A日程 試験問題

時間： 90分

問題： 次の文章は加藤秀俊『比較文化への視覚』（中央公論社、1968年）の一部です。
この文章を読んで、以下の二つの設問に答えなさい。

（設問一）

著者が言う波線部「個別的比較社会史」を、本文の記述を踏まえ、200字程度で説明しなさい。

（設問二）

外国人（必ずしも特定の国を指定する必要はない）に日本の文学、歴史、社会などを理解させるにはどうすればよいと考えますか。本文を参考にして、任意のテーマを例としてあげ、あなたの考えを800字程度の文章にまとめなさい。（本文にあがっているテーマを例としてとりあげてもかまいません）

一九六三年から六四年にかけて、わたしはアメリカの大学で講義をつづけていた。主な講座は社会学一般理論だが、わたしが日本人であるところから、日本社会論という特殊講義をひきうけた。

ひとつの独立した社会とその文化構成の問題を、他の文化のなかで育つたひとに理解してもらうことはむずかしい。とりわけ、日本のような密度の高い歴史社会を理解してもらうことはほとんど不可能なことにぞくする。日本に即して日本を語ることはやさしいけれども、それは世界に流通しうる説得力をもたない。

どんなふうにしたら、外国人とりわけアメリカ人のように素朴な国民に日本を理解させることができるか。わたしは講義の準備をしながら考えた。方法がひとつある。それは比較社会学なしいし比較文化人類学の方法である。つまり、日本文化ないし日本社会の問題をそれだけ孤立させて論じるのではなく、それと類似の問題を日本以外のところできがし出し、いわば、それを媒介にして日本をあきらかにする方法である。

たとえば、ここに神道というものがあ。これを説明するために、わたしは、北ヨーロッパの土着信仰のひとつ、ドルイッド教をまづひきあいにだす。もちろん、ドルイッドと神道はちがう。ちがうけれども、死者のタマイシイの理解の仕方など、どこかしら似ている。

仏教と神道の習合過程を論ずるときには、アルプス以北の土着信仰とキリスト教との習合(たとえばクリスマス行事)を考えてみる。たいへん似ているのである。ついでに、唐とローマとをひきくらべてみると、二大宗教伝播の過程がさらにはつきりする。わたしは、アメリカの学生たちに、まず、『ゲルマニア』を読ませ、フレイザーを読ませ、しかるのちにサンソムの『日本』やベネディクトの『菊と刀』を読ませた。いったんフレイザーで、キリスト教以前のヨーロッパを確認させておけば、仏教以前の日本を理解させることがぐんとラクになる。日本を「神秘」的にわからせるのではなく、それらに納得のゆく仕方わからせることができる。いわば、あいだ

にワンクッションおくことで、アメリカの学生にとつて、日本はごくあたりまえに理解できる対象になるのだ。

ただそのさい、わたしがころみたのは西洋を基準にとつて日本を考へることではない。むしろ、西洋も日本もあんまり気にしないで、同格に類比してみることなのである。日本のことを西洋人にわからせようとして、その「特殊性」を強調すればするほど、彼らは、ますます日本との距離感に圧倒されてしまう。「特殊性」をあげつらつてゆけば、世界じゅう、どんな国だつて「特殊」なわけだし、「特殊」をもちだせば、ああそうですか、ということになつて、それからさきへすすむことはできなくなる。「特殊」で説明するのは、理解をせまるようにみえて、じつは理解を拒否する立場なのではないか。

わたしの比較社会学は、それと対照的に、「特殊」に力点をかけるかわりに、むしろ、ふたつあるいはそれ以上の社会の類似点を抽象して、すこし乱暴にいったん普遍化してしまうのである。「特殊」を語るの、それからあとでもおそくはない。ちよつとひどい言い方だが、わたしのみるころでは、地球上どこに行つても、人間のやることなんか、だいたい似たようなものだ。社会編成の仕方だつて、もの考え方だつて、それほど基本的がちがうものではない。基本的がちがわないからこそ、小さなちがいがやたらに気になつて、から十まで「特殊」だ、と思ひこんでしまうのである。

ところで、このような方法で比較社会学を構想し、ノートをとめながら、わたしは、あらためて歴史の問題を考へないわけにはゆかなかつた。わたしの対象たる日本社会は、じつにキメのこまかい歴史社会である。現代日本の社会構成なり文化パターンなりを説得的に論じようとするならば、どうしても、その歴史的背景を視野にいれて立体的な論理を構築してゆかねばならぬ。社会学という学問は、原理的には平面操作の学問であつて、歴史は、ちおう、その平面への投影といふかたちでとらえられる。それは、それなりにひとつの方法だ。

しかし、本格的にふたつあるいはそれ以上の社会の比較をころみているうちに、わたしは、歴史を社会学への補助材料としてみているだけでは不十分だということに気がついた。平面投影という仕方ではなく、まさしく歴史としてとりあつたうえで、比較社会学の枠組のなかに入れることができるのではないか。もとよりわたしは、歴史家ではない。しかし、歴史家のあきらかにしてくられた歴史の諸事実を素材にして、じぶんなりの説を立てることはゆるされるはずである。アマチュアはしよせんアマチュアだが、プロとちがつた無鉄砲さと気軽さで歴史をあらためて検討してみよう。わたしは、そんなふうで考えた。さいわいなことに、アマチュアの無鉄砲さで歴史を検討することは、今西錦司先生をチーフにする人類進化研究班ですこしばかり下地ができていた。わたしは歴史の勉強をはじめた。

ただ、目的はあくまでも、社会比較論である。歴史の勉強もつばら、比較史という立場になる。わたしは、それをわたしなりの比較社会史と仮に名づけることにした。

この比較社会史は、さしあたりの現実の要求としてはアメリカの学生のために用意するものであつた。さらに技術的にいえば、それは日本を理解させるための手段としてのくふうであつた。したがつて、比較史は、日本とヨーロッパということになる。わたしの関心事は、日本史と西洋史のあいだの類似点をひき出して、社会史の類比をすることである。

だが、はじめは、そういう現実的必要から考へ出した方法が、だんだん、それじし面白くなつてきた。学生たちへの講義のためでなく、わたしじしんにとつて、比較社会史は魅力をもちはじめたのである。とりわけ、アマチュアリズムの自由さで考へると、日本史と西洋史がおそろしく似ているのにわたしはおどろいた。なにか、はじめから、言いあわせたように似たコースをたどつていのである。日本の「特殊」事情は、わかりすぎるほどわたしにもわかつていゝつもりだが、地球上の他の地域とくらべると、日本およ

びヨーロッパは、まったくおんなじだ。「特殊」事情は、お互いに無視してもいっこうにさしつかえない程度のものだ。

この考え方のヒントになっているのは、ひとつには梅棹忠夫氏の『文明の生態史観』であり、ひとつにはウィットフォーゲルの灌漑文明論である。わたしは、いちおうそれらの理論を下敷きにしなから、社会史の個別論を構想してみた。

たとえば、まえにもちよとひきあいに出したが、唐とローマを比較してみる。ちがいはいっぱいあるけれども、帝国膨脹と、それともなう文化接触と文化伝播の機能はおそろしく似ている。すこし時代が下つて西洋のルネッサンスを考える。日本の室町文化はちよとそれに對比できるのではないか。浄土真宗の成立は、西洋宗教改革と対応するだろう。桃山時代は、エリザベス朝と比較できる。装飾的なデザインなども、おどろくほど似ている。わたしは、そんなふうにして、いろんな個別的ケースをいじくりまわしてみた。そして、その作業をつうじて、わたしじしん、西洋事情がすこしずつわかつてきたし、同時に日本のもともよくわかってきた。

ところで、このような個別的比較社会史を勉強していて、わたしがとりわけ関心をもったテーマのひとつは、日本の徳川時代の問題である。とくに、それを「鎖国」の文脈で考えてみることである。近代日本の「特殊」事情を理解するためのカギも、どうやらそのへんに用意されているように思えるのだ。以下、この部分の比較社会史をすこしくわしく考え、それをふまえたいうえで、それが現代の日本にもついている意味を検討してみたい。

(注)ドリュイド ガリア・ブリタニアに定着した古代ケルト人の宗教。

出題内容

小論文試験の目的は、与えられた課題文に対する読解力(今回の問題では、設問一がそれにあたります)と、それを踏まえて自分の考えを相手にわかりやすく伝えるための文章力を確認するためであることはいまでもありませんが、さらに、与えられたテーマに対し、あなたの知識や経験を踏まえた独創的な考えが提示されることを期待しています(今回の問題では、設問二がそれにあたります)。とはいえ、いかなる考えにしろ、読者を納得させることができる、論として最低限の合理性が求められます。そのほかに、誤字脱字がないように注意するのはもちろん、文字を楷書で丁寧に書いているかといったところにも、読者を念頭においた書き方がなされているかという点で、評価の対象になります。

講評

問題は、社会学者の加藤秀俊による『比較文化への視覚』(中央公論社)からの出題です。1968年に出版された比較的古い文章ですが、比較社会学という学問が目指すものと、その学問どのように展開していくかを知ることができる内容です。テレビでは日本の文化の特殊性を紹介する番組をよく目にします。それはそれで、普段われわれ日本人があたりまえのこととして見過ごしている自国の文化に気づくという点で興味深いものですが、それぞれの社会の歴史(的事情)に注目した比較社会史を構想している点が、この文章の主題といえます。設問一も、「このような個別的比較社会史」の「このような」が指示する内容をおさえながら考えるとよいでしょう。設問二の「本文を参考にして」とは、まさに著者のいう「比較社会史」的観点・手法という意味ですが、あまりむずかしく考えるとなかなか書けなくなってしまいます。

学習のポイント

小論文対策としては、やはり日頃から新聞の社説やコラム欄を読んで、要約するといったトレーニングが効果的です。また、テレビも含めて時事問題にも慣れ親しんでおくと、テーマやアイデアを考える際の選択肢が豊富になります。同じ文章を要約するにしても、慣れるに従い字数制限を設定して、200字、100字とそれぞれの字数での要約の仕方というものを実践すれば、どこが削ってもよい部分で、どこが残しておくべき部分であるかの判断ができるようになります。そして、考えるという点では、読んだ後で、自分の考え(意見)をもって、その妥当性を根拠を明示していうことができれば、ひとつの論として成り立ちます。それが、より適切なことばで表現できるよう、さまざまな本を読んでさまざまな表現を学び、また、『類義語辞典』といった辞書で、語い力を増やし、表現力を身につけたりします。